

## インターネットの時代の始まり

## Beginning of the “Real” Internet era

千房けん輔（エキソニモ）

SEMBO Kensuke (exonemo)

20 年前の 1996 年という、自身の所属するアートグループであるエキソニモ（の原型とでも言うもの）が始まった年である（つまり IAMAS とエキソニモは同じ年なのである！）。最初の 10 年は、あえてテーマを設定せず、過去を振り返らず、その瞬間瞬間に一番自分たちのアンテナが反応する方向に突き進んできた。そして 10 年経った 2006 年頃、自分たちの来た道を振り返ってみると、行き当たりばったりだと思っていたその軌跡に、一筋の流れの様なものがあることに気がつけた。奇しくも 2006 年はアルス・エレクトロニカでゴールデンを獲るという客観的な評価が与えられた年でもあった。その後の 10 年は、まだ統括できていないが、ある種立ち位置やスタイルが確立してきた時期だったように思う。そして去年より NY への滞在という“場所”の変化があり、20 年目になる今年、2012 年から始めた IDPW というグループの主催する「インターネットヤミ市」が世界中の都市で開催され始めるなど、活動の内容も変化してきている。2016 年現在のこのポイントは、振り返った時に大きな節目になる予感がしている。

インターネットの歴史で見れば、1996 年はインターネットが一般に普及し始めた時期であり、限られた人間だけがインタラクティブ性の低い「ホームページ」を巡回しているという状況だった。2000 年以降、次第にネットはプラットフォーム化し、blog やソーシャル・ネットワークを中心とした双方向性の高いコミュニケーションが中心になってきた。2009 年前後の iPhone や Twitter の普及から常時モバイル接続が当たり前になり生活の中に浸透したことで、一気にインターネットの風景は様変わりした。もはや同じ「インターネット」が、20 年前と今とは同じものを意味しないような状況だと言える。

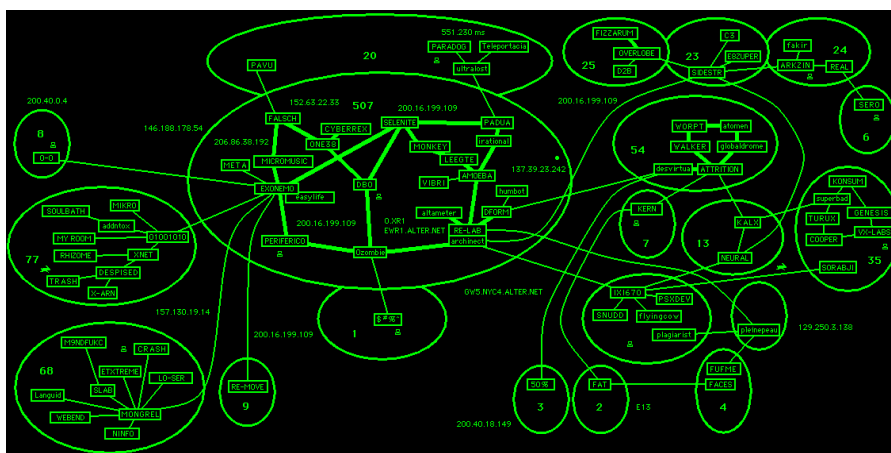


図 1 <http://map.jodi.org/> net.art の先駆者 JODI の作った当時のネットアートの接続図

ネットアートの歴史では、20年前はインターネットという未開拓の地（アンダーグラウンド）を発見したアーティストたちによる「net.art」と言われるムーブメントがあった。それは、インターネットと言う新しい力学を持つ空間の、可能性や限界を確認するような作業であった。2000年以降のコミュニケーション中心のインターネットの世界では、その役割を終え、ムーブメントは一度途絶えた。その後 Flash などのインタラクティブ性が高いツールが普及すると、あらゆる娯楽がインターネット上に再現され始めた。インターネットは新しいフロンティアではなく、開拓が終わり分譲地化していく。ソーシャルメディアの時代になると「ポスト・インターネット」と呼ばれる、インターネットの中で育った感覚をアートとして表現するような状況が現れ始め、「仮想空間」と呼ばれ現実と分けて捉えられていたインターネットは、現実空間と融合し始める。そんな中、その融合の齟齬を楽しむ感覚から生まれたのが「インターネットヤミ市」であり、その価値観は一般化したと言える。

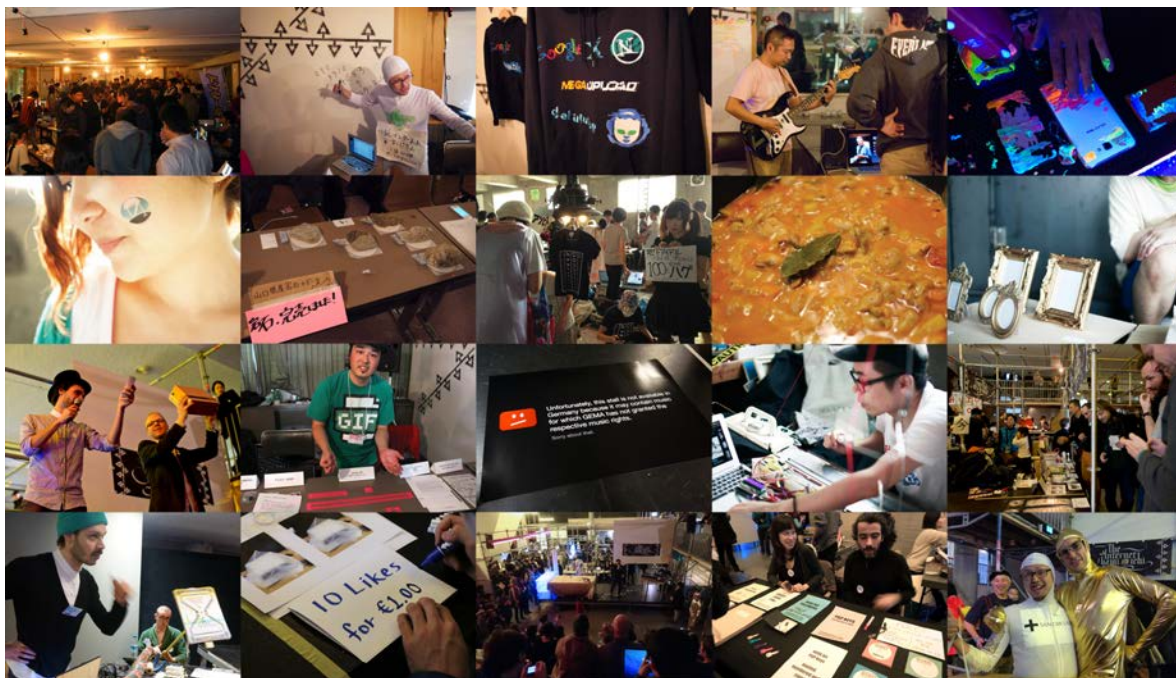


図2 インターネット ヤミ市 インターネットに関するものをリアルに売り買いするフリーマーケット。2016年始の時点で世界11の都市に拡大している

このように、自分、インターネット、そしてネットアートの歴史を振り返ってみただけでも、その状況が常に不安定に変化し続けていることが分かる。そして新しいフロンティアの発見から始まり、常に進化し続ける環境が、ある種の熱量を生み出していた時代だったとも言える。そして原稿執筆現在、個人的にも、世界的にも一つの節目を迎えつつあるのではないかと感じている。

自分の中では最近ひとつ、エポックな体験があった。2014年にエキソニモで製作した「Body Paint」というシリーズ作がある。これは、身体に単色のペイントを施し撮影さ

れた人物の映像をモニターに映し、その人物以外のスクリーン部分も同色でペイントしたという作品だ。コンセプトとしては情報機器が身体の一部になってきた現代の人間にとっての“ボディ・ペイント”の定義を示し、身体の境界線を探るということなのだが、この作品をNYの **bitforms** ギャラリーで展示した時に、ギャラリーのオーナーからこんな質問をされた「ディスプレイが壊れた時にどうすればいい？」それに対して「別のモニターに塗り直す」と回答したのだが、とっさに「そうじゃなくて、君たちが死んだ後の話だよ」と切り返された。同じ時期に、別の場所で出会ったアーティストからも全く同じ質問を受けた。



図3 “Body Paint - 40 inch/Male/White” by exonemo 2014-

その時、自分の中で大きく価値観が変わる感覚があった。つまり、アートというものを、当たり前のように人生のタイムスケールよりも大きなタイムスケールで捉えているカルチャーがあり、そこにいま自分がいるという事。目の前のことでがむしゃらになっていた自分には思いつきもしなかった時間に対する視点だった。

そして空間に関しても変化を感じた。今まではインターネットさえあれば場所は関係ないと思っていた自分だが、おそらくそれはインターネットに肩入れするあまり、自身を洗脳するスローガンだったのではないかと思い始めている。場所を移動する、つまり身体の有在処を変えること、そして異なる文化に中に入り込むことが、ものの見方に大きな変化をもたらし、インターネットの風景も変えてしまうと感じている。よく考えれば当たり前のことだが、実際にはなかなか気づけなかった、いや認めたくなかった事でもある。

20 年前にインターネットと出会ったことで、時間と空間の感覚が変わった。そして今、また時間と空間の概念が更新されようとしている。あくまで個人的な体験からの気づきだけれども、このことは今の時代にも必要なことなのではないかと考えている。

これからの 20 年は、今までとは違う意味の時代になってくるだろう。今まではある種「祭り」の状態で、インターネットがもたらす新しい価値観、テクノロジー、デバイスに狂喜乱舞し、そしてすぐに忘れ去り、新しい次のモノが来るのを待っているだけで良かった。今後、テクノロジーが背景化していく中で、テクノロジーそのものは今よりもっと見えにくくなっていくだろう。いつの間にか“サイバースペース”は実空間と溶けあい姿を消し、視界を覆うような巨大なコンピュータは、手のひらサイズになり、ポケットの中に隠れた。そして、目の前に広がる現実空間に体一つで放り出された時、既にインターネットを経由した僕らの身体で、どこへ向かっていくのか。

祭りの喧騒を終えて、ふと立ち止まり考える。方向性を見定めて、歩き始める。進むべき方向を自分で考え、選んでいかなくてもならない時代が始まる。そんなこれからの 20 年を 100 年のスケールで見た時、今こそがインターネットの時代の真の始まりだと言えるのかもしれない。